昭和60年～64年

1985～1989

昭和60年聖流郷まつり（渓流釣り大会）が始まる

「鬼の金剛」で悪霊追っ払い

地区民ら入り口に張り渡し

悪霊を追い払い地区の安全を願う「鬼の金剛」の行事が一月十六日、上浮穴郡面河村の六地区でそれぞれ行われた。

この行事は、地区の人々が組長の家に集まり、わらで大草履やわらすぼ弁当、縄などを作り、地区の入り口の谷に渡して悪霊を退散させるもので、年明けから十五日間禁じられていた鐘、太鼓を使った念仏も同日からおおっぴらに唱えることができるようになる。他地域では「念仏の口あけ」とか「お日待ち」などとも呼ばれている。

同村渋草下里成では、明治時代以前から行われていたが、終戦前後の数年間途絶えていた。それが二十六年ごろから復活、今に至っている。

同日も朝から組長の土居雅俊さん(五三)方に同地区の世帯主五人が集まり、手分けして大草履、わらすぼ、縄を作る作業に挑戦。このうち大草履を編んだのは古老の菅茂松さん(七六)。大草履を作るのは難しく、同地区で編むことができるのは菅さんだけになっている。

完成したものを前に全員で地区の安全を祈って鐘と太鼓で念仏を唱えたあと、二本の縄に十六人分の竹著(ばし)を通し、両端に大草履とご飯と石を入れたわらすぼ弁当をくくり付けて、地区の入り口の谷に張り渡した。大草履と石入りご飯で悪霊を脅かし追い払おうとの願いが込められている。

(昭和60年1月17日)

大きな「足中草履」をわらで編む菅さん

ドラム缶で堅炭作り

自給用、出来栄え見事

本格的な堅炭が簡単に作れます――。上浮穴郡面河村本組、西森盛道さん(四八)は、ドラム缶を利用した自家製炭焼き窯を裏庭に作り、自宅で使う炭を自給している。

西森さんは二十年ほど前、林業の仕事で宮崎県東臼杵郡椎葉村に滞在。灯油ストーブなどはない所で、なんとか燃料を確保しようと、ドラム缶で仲間四人と炭作りを思いついた。この時、やってみると思いのほかうまくゆき、暖房や料理に大いに利用した経験を持つ。故郷の面河村に帰ってからも、十五年前に一度ドラム缶で炭作りを行ったが、今年再び思いついて自家製窯を作ったもの。

窯作りにかかる時間は一人で約二時間。炭は三十～三十五時間で出来上がる。原木はナラ、サクラのほかカキ、ユズ、モモなどを使い一回で十五キロの立派な炭がとれる。

(昭和60年2月7日)

ドラム缶を土中に埋めて作った「西森式炭焼き窯」

クラブ結成コイ供養

愛好者　釣りマナーも訴える

釣り上げたコイの霊を慰め、釣り場のルールを守ろう――。四月二十九日、上浮穴郡面河村笠方の面河ダムで愛好者らが「コイ供養」と「面河ダム鯉釣りクラブ」の結成式を行なった。

釣りを通じて知り合った同郡久万町下畑野川の徳田吉功さん(五二)ら十人は、釣り場の環境を良くし、トラブルなしに釣りを楽しめるようにと、クラブ(徳田吉功会長)を結成、合わせて自分たちが釣って楽しむコイを供養することにした。

同日は地元の人たち数人も招き、湖岸にしつらえた祭壇の前で、釣り仲間でもある藤原栄道薬師寺副住職(面河村渋草)がお経をあげてコイの霊を慰めた。そのあと食事をしながら釣り仲間や地元の人との親ぼくを深めた。

(昭和60年5月1日)

面河ダムで行われたコイ供養(面河村笠方市口)

今はなき古里に酔う

過疎化の激しい上浮穴郡面河村笠方地区で七月十四日、地区を出ていった人と地元の人たちが一堂に集まる「笠方同郷会」が開かれ、再会の喜びに浸ったり、思い出話に花を咲かせた。

以前、同地区は村内で一番大きく、人口も二百戸、千人近くいたが、三十八年面河ダムが完成して、友田、松原、下向など六集落が水没すると、八十四世帯、三百八十人が村外に転出、以後も人口減が続いた。現在、約四十戸、百人足らずが住むだけとなった。

同郷会は、もともと終戦後の二十二年ころ、村外に出ていた人たちが帰村、青年団の伊藤正さん(五八)＝松山市樽味町、木材業＝らが中心になって呼びかけ、開いたのが最初。お年寄りや若い人も参加させようと、五十四年から笠方同郷会として毎年開いている。

(昭和60年7月16日)

再会を喜び合う笠方の人たち

山の下刈りで活動費稼ぎ

上浮穴郡面河村農業後継者協議会(光田優会長、八人)は十六日、村内の植林地で下刈りをした。下刈りは、植えて六年目くらいまでのスギ、ヒノキ植林地の下草を刈り取る作業だが、急傾斜地が多くかなりの重労働。同村では高齢化が特に進み、山持ちでも下刈りをする余裕のない人も多い。

同協議会では、会の活動費を稼ぎ出し、村内山林の育林にも役立つ一石二鳥の効果を狙い、四年前から作業を請け負っていた。この日は後継青年と協力者など十一人が参加。同村渋草の四年生スギ、ヒノキ植林地一・八ヘクタールで作業した。

(昭和60年6月19日)

急斜面での下刈り作業に汗を流す農業後継者協議会のメンバーたち

「マイタケ」面河特産に

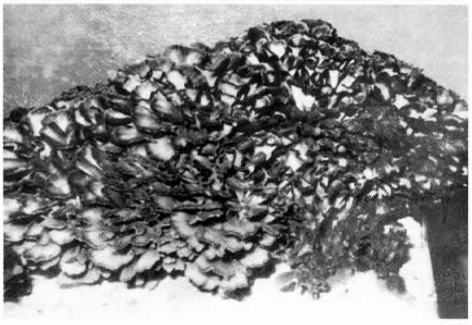
来年から生産着手　四国初の施設栽培

農林業の低迷と過疎化に悩む上浮穴郡面河村は、活性化対策の一つとして、マツタケ、シイタケと並び日本三大高級キノコといわれるマイタケ（舞茸）の施設栽培に取り組むことになり、生産者組織も発足して準備作業が進んでいる。

これまで栽培は難しかったが、ハイテク技術の発達で空調施設を利用した周年栽培が可能になり、生産、消費量とも年々増えている。四国ではまだ栽培されていない。

面河村では、村内に自生もあることから気候条件も適しているマイタケに目をつけ、二～三年前から調査研究を続け、このほど生産組合（菅祐直組合長、組合員五人）を結成した。事業費六千万円で年内に空調設備のある施設（四百平方メートル）を造り、来年初めから生産を始める計画。

（昭和63年4月14日）



味がよく、鍋物に最高といわれるマイタケ

さすが産地、ヒノキ材ふんだん

面河村森林組合新事務所できる

上浮穴郡面河村森林組合（木下勲組合長、組合員六百一人）の新しい事務所が完成、六月十八日落成式が行なわれる。

昭和三十五年、同村渋草に建てられた旧木造事務所を取り壊して建て替えた。

同村のヒノキ材をふんだんに使った木造二階建て。敷地は百十一平方メートル、延べ床面積は百六十七平方メートル。一階には事務室、組合長室、更衣室、同村商工会事務所が入り、二階は会議室、書庫を備える。総事業費は千三百九十七万円。十八日の落成式には関係者約八十五人が出席、午前十時から新事務所で神事、同十時半から村住民センター大ホールで式典が開かれる。

（昭和60年6月14日）

新しくできた面河村森林組合事務所

成人式で郷土愛誓う

今年村制百周年を迎える上浮穴郡面河村で三日、成人式が行われ、過疎に負けず郷土を愛そうと誓い合った。

同村は人口千三百人足らずで、昨年は鉄道も国道もない「ないないサミット」への参加で話題を呼んだ。四十四年生まれの新成人は男性四人、女性九人の十三人で、十人が式に参加した。

あいさつに立った中川鬼子太郎村長は、「政治への関心」「活字に親しみ知識を深める」の二点を要望したあと、「やる気のある者がおれば人口は少なくても発展していく」と、協力を求めた。

これに対し村職員、学生、主婦などの新成人が一人ずつ抱負を述べた。

（昭和64年1月5日）

抱負を述べる面河村の新成人

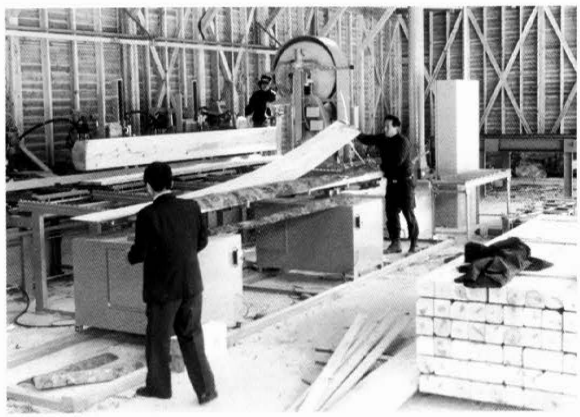
面河にも本格製材所

キノコ栽培向けおがくず生産

上浮穴郡面河村に同村森林組合（木下勲組合長）の製材所がこのほど完成し、操業を始めた。最新機械による製材のほか、キノコ栽培用のおがくずを製造するもので、低迷する林業の活性化が期待されている。

同村民有林の人工林業率は八〇％に達し、戦後植林した木が多く伐期を迎えている。以前から木材加工施設が検討されていたが、同村の生産組合が近く始める高級キノコ・マイタケの施設栽培用に、おがくずを森林組合が製造することになったのがきっかけで実現した。個人の加工施設が二軒あるが、本格的施設は村で初めて。

（昭和63年11月12日）



完成した面河村森林組合の製材所

参拝記念の台紙

石鎚山お山開きで

上浮穴郡面河村渋草、面河郵便局（中川良夫局長）内の面河郵趣会は、七月一日からの石鎚山お山開き（十日まで）を記念して、切手五枚（二百円分）に二日付のスタンプを押した参拝記念台紙五百部を作成、一部二百円で販売している。

同郵趣会の記念台紙発売は、石鎚山の標高にちなんだ五十七年（一九八二年）が最初。この時は五千部を発売し、好評のうちに売り尽くした。

今回は二回目で、今後毎年お山開き期間中に発売する計画。また同郵便局は、六日午前九時から午後三時まで、石鎚スカイライン終点土小屋に、面河郵便局土小屋臨時出張所を開設し、郵便物の引き受けや、切手はがきの販売、記念押印を行う。

（昭和61年7月4日）

面河郵趣会が販売している石鎚山参拝記念台紙

釣りどきです

上浮穴郡地方で、これから五月の連休にかけてアメノウオ（アマゴ）釣りの本番に入る。石鎚の清流郷とうたわれる面河村でも、アメノウオ釣りの太公望たちでにぎわい始めた。

アメノウオ釣りの釣り場は広範囲で、スカイラインのふもとの関門以北の通天橋から赤石河原までの鉄砲石川。もう一つは通天橋から御来光の滝までの面河川本流でも狙える。いずれも、新緑がいっぱい。週末など弁当持参で、さわやかなファミリーフィッシングが楽しめる。

（昭和60年4月19日）

新緑がいっぱいの清流。さわやかな面河渓谷のアメノウオ釣り（若山）

ふるさとの川　面河川①

御来光の滝　苦心の測量

西日本最高峰の石鎚山（一、九八二㍍）南斜面を源とし、上浮穴郡のほとんどの水を集めて高知県に入り、土佐湾・太平洋に注ぐ川が仁淀川である。源流から両県県境までを面河川と呼んでいる。流域は四国山地の比較的多雨地帯で、水量豊富な川だったが、面河ダムの取水や下流での発電所、ダム建設など開発が進み、昔の面影は失われてしまった。それでも県内有数の清流の魅力で、自然探勝や観光、渓流釣りにと愛され続けている。

面河川の長さは四十九㌔で県内四位、流域面積は六百平方㌔で肱川に次いで二位という大河川だ。主な支流に割石川、直瀬川、久万川、黒川などがある。ちなみに仁淀川全体では長さ百二十四㌔で四国で四位、流域面積は千五百六十平方㌔で吉野川、渡川に次いで三位という位置にある。

面河川を県境から逆にたどると柳谷村、美川村をへて面河村に入り、面河渓本流に至る。本流をさらにさかのぼると標高千二百～千三百㍍前後のところに御来光の滝があり、その上はわずか一㌔足らずで姿を消してしまう。

「幽谷や知らで過ぎたる瀧幾つ」

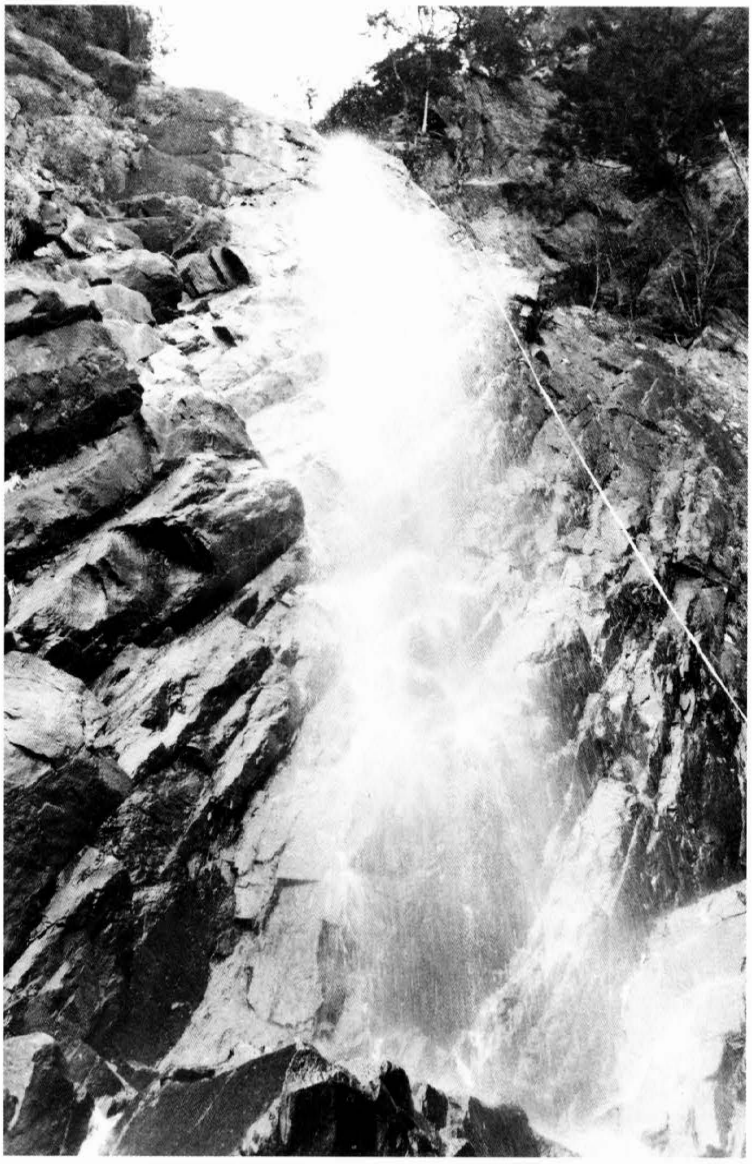
医師で、俳人だった故酒井黙禅が、面河渓の神秘的な美しさを詠んだ句で、昭和六年大阪毎日新聞社が募集した「日本新名勝俳句」に最高位で入賞した。しかし、美しかった滝の多くが原生林の伐採や、スカイライン工事の影響などで姿を消してしまった。

そのなかで御来光の滝は、面河渓一の名滝といわれる姿を保っている。スカイライン長尾尾根展望台からのぞむと、圧倒的な石鎚の山容の中ほどに糸のように細い筋となって見え、真昼には太陽光を反射して白く輝く。

御来光の滝は二段になっており、高さについては四十一㍍（村誌）、八十七㍍（愛大山岳会編『愛媛の山と渓谷』）など諸説あった。そのため五十八年十一月、村上節太郎愛大名誉教授（地理学）、村職員らが実地調査を行った。

滝へのぼる川沿いの道が荒れているため、石鎚登山道愛大小屋付近から村職員二人が滝まで下り、滝の真上からテープに重りをつけて下ろして長さを測った。その結果、滝は二十三㍍の上段に四十一㍍の下段が連続しており、合計六十四㍍と判明した。

測量にあたった菅努さん（三五）＝現むらおこし対策課＝は「滝の上から下をのぞくと、上段の滝つぼが見えた。山道をう回して滝の下へ回ると、岩がゴロゴロして小さな滝つぼになっていた」と当時の様子を思い出す。（昭和63年5月24日）



下から見上げた御来光の滝の威容

ふるさとの川　面河川②

面河渓と観光　明治に初の探勝団

「白雲のたなびく峯にきてみれば　伊予の高嶺の麓なりけり」

江戸天明年間（一七八一～八八年）ごろ、松山藩山林奉行の加藤勘介が踏査に来て残したこの歌が、面河川最上流の面河渓が文献に現れる最初といわれる。一般に知られるようになったのは明治以後で、当地の小学校教師石丸富太郎（温泉郡重信町出身）が、海南新聞に熱心に投稿して渓谷美を紹介したのがきっかけとなった。

熱意に応え明治四十二年、松山の詩人、画家、登山家らによる「面河探勝団」が組織され、徒歩で川内から黒森峠を越えて面河川に入った。初の観光団に、夜にもかかわらず村民総出で歓迎したという。紀行文が海南新聞に掲載されてから、ぽつぽつ観光客が訪れるようになった。空船橋、蓬莱渓など探勝団の命名が今に残っている。

大正末に児童文学者巌谷小波、昭和初めに歌人吉井勇らが訪れ、ようやく全国的に有名になり、昭和八年に文部省は「まれに見る渓谷美」として国の名勝（文化財）に指定した。これを機会に村名は、柚川村から面河村に改称。三十年石鎚国定公園、四十四年面河自然休養林など次々に指定を受けた。

原生林がうっそうと茂るなか、急流となり淵となる変化の妙、真っ白な河床と青く澄んだ水の対比……。「小規模ながら関西で最も優れた渓谷」と評された面河渓は、村の最重要観光資源となった。

面河渓を訪れる観光客は年間二十五万人前後。入り口の関門にはホテルや村営観光センター、五色河原付近には村営国民宿舎「面河」や渓泉亭がある。村内の観光産業収入は約十億円で、建設業の約十五億円に次ぐ基幹産業だ。

しかし、車社会の進展でマイカー客が増え、紅葉シーズンには車が渋滞してあふれかえるほど。それに伴い観光形態も変わってきた。じっくり時間をかけて自然を探勝するよりも、五色河原付近だけを見て短時間で引き揚げる人が多くなった。これでは面河渓の本当の良さは分からない。

渓谷を眺める遊歩道が「渓泉亭」から奥へ続いているが、蓬莱渓や紅葉河原で弁当を広げるグループはいても、とうとうと滝が流れ落ち、男性的な景観を誇る下熊淵や上熊淵の方まで足を延ばす人は少ないようだ。

また面河川本流や支流の鉄砲石川を眼下にのぞみ、石鎚山頂を眺めることのできるパノラマ歩道（一・六キロ）も登る人はまれだ。

一方スカイラインに来た人で、渓谷に入るのは半分以下。こうした人を渓谷へ引きつけるとともに、渓谷での滞在時間を長くしたいと、村では渓谷内への駐車場や遊園地、植物園の新設、遊歩道の整備などをしたい考えだが、各種の制約があり実現は容易ではない。

（昭和63年5月25日）

国民宿舎「面河」

渓泉亭

ふるさとの川　面河川③

面河ダム

地元犠牲、過疎に拍車

面河川支流の割石川に建設された農林省の面河ダムは、川の様相を大きく変えた。本支流合わせた面河川からの取水で、同川上流の水量が何分の一にも減り、観光、漁業に大きな打撃を与えた。また笠方地区の水没で面河村の過疎化が進むなど、地元の犠牲も大きかった。

東中予にまたがる道前道後平野は、雨量の少ない瀬戸内式気候でたびたび干ばつに見舞われていた。このため「虹の用水」といわれる道前道後水利総合開発計画が策定された。

ダムは標高六八〇㍍の笠方に設けられ、面河川本流（面河渓）と、支流の鉄砲石川、坂瀬川、妙谷川、割石川から毎秒最大十五㌧（年平均の実績は毎秒約二・五㌧）を取水。昭和三十八年から貯水を開始した。

ダムの総貯水量は二千八百三十万㌧で、道前道後平野の水田、樹園地に約三千二百万㌧（六～十月）の農業用水と、松山・松前地区の臨海工業地帯に一日最大十万六千㌧の工業用水を供給。さらに分水途中の落差を利用して最大出力二万五千百㌔㍗の発電をしている。工業用水、発電は県営。

この事業のおかげで、両平野は深刻な水不足から解放され、地域の発展に大きく貢献した。ただ地元面河村にとっては、「マイナスだけで、いいことは一つもなかった」（中川鬼子太郎村長）ということになった。

面河川本流と鉄砲石川が合流する面河渓の関門は、両川の水が全部取られるため、ほとんど水流がなくなった。「水がとうとうと流れ、しぶきが飛んで近寄るのが怖いくらいだった」渓谷屈指の景勝地関門は、今はすっかり水量が減ってよどみ、「夏には青い藻が生える」までになった。

また国民宿舎下手の本流に設けられた取水堰によって、スカイライン工事や台風のため面河渓に入り込んだ土砂が、下流に流されずに堆積し、面河渓の景観を損ねる要因の一つになったと指摘されている。

一方、ダム湖に沈んだ笠方地区は、村一番の穀倉地帯で人口も多かった。先祖伝来の土地を失う住民の気持ちは複雑だったが、当時は「国の方針に逆らうなどとんでもない」という時代。「面河方式」と呼ばれた団体方式での補償交渉はスムーズに運んだ。

八十四世帯三百八十人が補償金をもらって松山などへ出た。「そのあとが問題だった」と中川村長。松山へ出た人たちが「仕事があって住みやすい」と村内の親類、知人を誘ったからだ。このためさらに四百～五百人が村を出て、過疎化に拍車がかかった。最盛期五千人だった人口は、現在千三百人を切っている。

ダムによって年間約千二百万円の交付金が村に入るが、「これぐらいもらっても何にもならない」と同村長は渋い顔。さらに他のダムに比べ、ダム周辺の整備が手つかずだったのも村側の長年の不満だった。

ようやく本年度になって周辺整備計画を県が打ち出し、煮詰めの段階に入った。ダム湖の上流付近に公園、駐車場などを整備する案が検討されている。同ダムへは観光客、釣り客などが年間一万人ぐらい訪れており、整備によって同地区が活気づくことが期待されている。

満々と水をたたえる面河ダム。湖底には面河村の穀倉地帯だった笠方地区が沈んでいる。

（昭和63年5月28日）

ダムに沈んだ笠方地区は、村一番の穀倉地帯で人口も多かった